

### 3. 少子高齢・人口減少社会を生きる

#### 資質・能力を育む総合的な学習の時間

##### 1) 実践研究の目的

総合的な学習の時間においてこそ、将来、子どもたちが生きていくために必要な資質・能力を育むことが求められる。そのためには、予想外の問題に対して前向きに取り組む学習を行う必要がある。だが現状は必ずしもそうではなく、調べ活動に終始したり、教師が構想した単元通りに進められていたりする。予想外の問題を考えることは容易ではないが、国勢調査に明らかなように、子どもたちが生きていく社会は少子高齢・人口減少社会である。その結果生じる問題について考えることはできる。つまり、少子高齢・人口減少によって生じる様々な変化を問題として取り上げれば、将来、子どもたちが生きていくために必要な資質・能力を育むことができるのである。

このような考えのもと、2004年に研究チームを作り、少子高齢・人口減少社会を生きぬくために必要な資質・能力を育むための授業の在り方について取り組んできた※。だが、当初、研究の趣旨が現場の先生方に理解されず、「少子高齢・人口減少社会を意識した授業には価値がありませんね」と先輩から言われたこともあった。ところが、数年前、大学2年生になった3人の教え子に再会する機会があった。彼らは、将来の夢を語る一方で次の言葉をつぶやいた。「先生の話が本当になった。少子高齢化が進行して人口減少が始まった。これからの日本の社会はどうなるのだろう」。先生方には受け入れられなかった授業内容を子どもたちは覚えていた。このことに驚くと共に、彼らが少子高齢・人口減少社会に直面し当事者となって生活している姿にも驚いた。

ここでは、これまでの研究概要に続いて、予想外の問題に子どもたちが挑んだ授業実践を二点紹介する。一点目は、突然バス停が撤去されたこと、二点目は、台風によって橋が流されたことに取り組む授業実践。どちらも探究活動の過程で生じた予想外の問題である。このような問題に取り組むことが、子どもたちが生きていくために必要な資質・能力を育むことが可能になる。この二つの授業実践を振り返ることを通して、少子高齢・人口減少社会を生き抜くために必要な資質・能力について考察する。

##### 2) 研究の概要

大学院修士課程在籍時（2004年4月1日～2006年3月31日）から取り組みを始めた実践研究は、日本生活科・総合的学習教育学会においてその研究成果を発表してきた。特に2007年6月に開催された第16回千葉旭大会では、「少子高齢・人口減

少社会を支える子を育む総合的な学習の時間の課題Ⅱ」と題して発表を行った。

本発表では、同学会の第14回、第15回大会での発表課題を踏まえ、まず馬居研究会顧問と新村が現行の総合的な学習の時間に内在する問題点を整理し、超少子高齢化による人口減少社会の特徴と課題ならびにその課題を解決するうえで必要となる人的資源の特性を明らかにした。その後、米津と渡部がそれぞれの実践を比較して、総合的な学習の時間の問題点を探った。米津が静岡県富士宮市で行った実践は、少子高齢・人口減少社会に関心を持たせるために、人口の変化を題材として取り上げたものであり、渡部の秋田県男鹿市で行った実践は、少子高齢・人口減少が進行し学校が廃校になることを題材として取り上げたものであった。この両者を比較したことにより、少子高齢・人口減少社会に向かっている地域で行う学習と、少子高齢・人口減少社会に直面している地域で行う学習の違いについて示すことができた。

2009年6月に鹿児島県で開催された鹿児島大会では、「少子高齢・人口減少社会を支える子を育む総合的な学習の時間Ⅲ」と題して発表を行った。本研究においては、少子高齢・人口減少と人口減少社会が進行する社会の特徴と課題ならびにその課題を解決するうえで必要となる資質について提案した。

本発表で取り上げた実践は、米津が2007年度に担任した第5学年で取り組んだ単元名「みんなが来たがる池」であった。1年生の時に遊んだ校内にある池が悲惨な状態であると気付いた子どもたちは、自ら動き始めた。毎朝登校すると池に通い、水面に浮いている葉っぱを拾い始めた。その後、学級で話し合い、学習問題「みんなが来たがる池にするにはどうしたらよいのだろう。」を作成した。グループ活動では、メダカの種類や微生物を調査したり、池に関する水道料金について調べたりした。そのことを学年や全校に伝えた。しかし、池との関わりが深まるほど、池で遊ぶとする他学年の友達と意見が衝突したり、池をきれいにする作業の仕方について学級内で意見が対立したりした。結局、結論を出すことができず、当初の池をきれいにする作業を終わらせることはできなかった。この実践を見直し、子どもたちが生きていくために必要な資質・能力を4点（世代間で支え合おうとする態度、多様な人たちと共に働き生活する必要性を理解する力、現実（ヒト・モノ・コト）を考えて提案する力、大人になったときの生活や社会を想像する力）提案した。

2013年6月に兵庫県で開催された兵庫大会では、「少子高齢・人口減少社会を支える子を育む総合的な学習の時間の課題と可能性Ⅳ」と題して発表を行った。

本研究においては、2012年に静岡で米津が行ったキャリア教育の実践に基づき、少子高齢・人口減少社会を生きていくことを余儀なくされる子どもたちに総合的な学習

の時間を通して身に付くようにしたい資質・能力とキャリア教育の課題について提案した。本発表で取り上げた実践は、米津が2012年度に担任した第6学年で取り組んだ単元名「貴船から学ぶわたしたちの生き方一人の生き方」であった。月曜日の早朝、学校の周りのごみ拾いをしている地域にある清掃業者に気付いた子どもたちは、「どうしてごみ拾いをしているのだろう」「どうして大人は働くのだろう」という思いを強くもつようになった。子どもたちは、親や地域で働く方に聞き取り調査を行い、職業についての理解を深めた。そして、実際に職場体験を行い、その活動をとおして、「働くとは相手のことを考えることである」ということを感じ取った。さらに、人口の変化から、職業の変化や自分たちが生きていく社会が少子高齢・人口減少社会であることを理解することができた。この実践を見直し、今の社会を生きていくことを前提にキャリア教育を行うのではなく、今とは異なる少子高齢・人口減少社会を生きていくことを前提にキャリア教育を行う必要があることを提案した。

このように日本生活科・総合的学習教育学会において実践を見直しながら、発表してきた。当時、受け入れられなかった授業内容も発表回数を重ねていくうちに理解されるようになり、今では少子高齢・人口減少社会を意識した授業の価値について異を唱える方は見受けられない。

次に、少子高齢・人口減少社会が直面する予想外の問題に対して取り組んだ授業実践を紹介する。

### 3) 授業実践

#### (1) 2013年 第3学年単元名「バス停がなくなった」富士宮市立内房小学校

本実践は、2年生7名と3年生4名の計11名の複式学級の内、4名の3年生が行った総合的な学習の時間の授業である。4名の3年生は社会科の学習で地域の調査活動をしているときにバス停(図9-12)で寂しく立っている高齢者を見かけた。その寂しそうな姿から、子どもたちは、高齢者のためにベンチを作りたいという思いを強く持つようになった。このことがきっかけとなり、総合的な学習の時間がスタートした。

子どもたちは話し合い、高齢者や地域の人のために



図9-12 バス停



図9-13 ベンチの設計図

ベンチを作り、各バス停にベンチを設置することを考えた。ベンチの作り方や大きさ、材料などについて話し合い、保護者にも協力をお願いした。

ところがベンチの設計図（図9-13）を考えている時に、突然駐在所の前のバス停が無くなるという出来事が生じた（図9-14）。すぐに学区にある他のバス停についても調べたところすべてのバス停がなくなっていることが判明した。突然バス停がなくなるはずがないと考えた子どもたちは、保護者や地域の方への聞き取り調査（図9-15）を始めた。

その結果、利用者が少ないために路線バスが廃止され、バス停が撤去されたという事実を突き止めた。すると今度は、路線バスが廃止されて、高齢者や地域の方が困っているはずだと考え、交番の警察官への聞き取りや保護者へのアンケート調査を行った（図9-16）。その結果、路線バスが廃止されて困っている人がいないこと、路線バスを廃止した代わりに料金が一定であるタクシーが整備されていることが分かった。

このことに気付いた子どもたちは、タクシーについても調べ始めた。市の交通対策室の方を学校に招いて話を伺ったり、実際にタクシーに乗る体験をしたりした（図9-17）。バス停がなくなるといった予想外のことが起きても問題を投げ出すことなく、最後まで子どもたちは追究活動を続けた。

このような活動を通して、問題を解決しようとする力を育むことはできた。そして、本来、子どもたちには、予想外の出来事を解決しようとする前向きな意欲があることを改めて感じ取ることができた。



図9-14 撤去されたバス停ベンチ



図9-15 聞き取り調査



図9-16 アンケート調査



図9-17 タクシー体験

## (2) 2014年 第5学年单元名「橋が流された」富士宮市立内房小学校

本実践は、小学校第5学年10名が行った総合的な学習の時間の授業である。

子どもたちは第4学年の総合的な学習の時間に、川に生息する生き物について調べ、魚や虫の種類から川の水がきれいであるという結論を導き出していた。また、社会科の昔の暮らしの学習からは、地域に住む人々が、川を大事にして生活してきたことについても学んでいた。

このことから、子どもたちは、昔の人々と川との関係に興味をもつようになり、昔の人々の生活について調べてみたいという思いを強くもつようになった。このことがきっかけとなって、第5学年の総合的な学習の時間がスタートした。

橋がなかった頃の生活について調べた子どもたちは、渡船を利用して川を渡っていたことや、川舟で米を運んでいたことを突き止めた。そして、予想した川舟をイラストで表したり(図9-18)、復元された川舟を見学したりした(図9-19)。

川に関する災害について調べた子どもたちは、昔は川が氾濫し家が流されたり、死者が出たりする災害が頻繁に起きていたことを学んだ。そして、水害から人々の命を守るために、高台に家を建てたり、竹を植えたりしていたことにも気付いた。

そんな時に、台風により二つの橋が流されるという問題が起きた。一つの橋は中央部分が流され(図9-20)、もう一つの橋は兩岸の土砂と共に、橋全体が流されてしまった(図9-21)。この光景を目の当たりにした子どもたちは、追究内容を変え、流さ



図9-18 子どもが予想した川舟



図9-19 復元された川舟の見学



図9-20 中央部分が流された橋

図9-21 全体が流された橋

図9-22 質問する子ども